Extended (or Cambodian) Mahāvaṃsa 訳註（六）

福田孝雄

爾来[317]、心よろこべるかの王は日毎に（供養すべき）比丘の数を倍加して、次第に（その数を）六万にした。（かくて[318]）六万の外道を斥け、六万の比丘に（王）家で常に食を与えた。六万の比丘に供養するために[319]、速やかにかれは高価なる硬食・軟食を調えさせて、城市を荘厳[2]せしめて[320]、僧伽に赴いて家に請じ、みちびき供養して多くの沙門の（資具を）与え、『師の説かれた法は、どれだけか』[321]と尋ねた。そこで、モッガリプッタティッサ長老は、これについて彼に説明した。八万四千の法門があると聞いて[322]、かの王は『私はこれらの（法門の各々に）精舎（を建立することに）[323]よりて供養するであろう』と（言った）。時に王は八万四千の都市に六十六倶胝の財を与えて、諸王[324]をしてそこここに精舎を（建立すること）に励ましめ、自らはかのアソーカ園（Asokārāma）を建立させることに努力した。かれは教（法護持）のために三宝の[325]（恭敬）と、ニグローダ（Nigrodha）（沙弥）と病人達に各々日毎に十万（金）を与えた。（比丘達は）[326]仏陀に与えられた財宝をもって、数多くの精舎において、常に種々の塔供養を行った。法に与えられた財宝により人々は常に法を憶持する[327]比丘達に、最良の四資具を捧げた。アノータッタ（Anotatta）[328]（池）よりの導水管のうち四本を僧伽に与え、一本を日々三蔵に通暁せる六十人の長老達のために与え、二本をアサンデ[329]ィミッター（Asandhimittā）[3]后に与え、一万六千人の（宮）女には日に日に二本を与え、王は自らは二本を使用するのみであった。六万の比丘と一万六千人の（宮）女とに毎日、ナーガラター（nāgalatā）と言う楊枝木を与えた。時に一日、王は[330]四正覚者を見て、大神通があって、一劫の間生きながらえて[331]いるマハーカーラ（Mahākāla）龍王のことを聞いて、かれを[332]黄金の鎖につないで連れて来るようにと（使者を）派遣して、かれを白の傘蓋の下に導いて、結伽趺座をさせて種々の[333]花をもって供養し、一万六千人の（宮）女をして囲繞せしめ

て言った。『友よ、[334]私に正法輪を転じた一切智、大仙にあられる無辺智の相好を示してもらいたい』と。か[335]の龍王は（その身辺）一尋までに光の冠をもって荘厳された三十二相八十[336]随好相で飾られたうるわしき仏陀の相好を示現した。これを見た（王は）歓びと驚きとに満ち、『[337]かかる相好がこの（龍王）によって示現されたが、如来の姿はこのようなものであったのか』とますます喜ぶのであった。[338]（かくて）大神通力ある大王は七日の間絶えず「目の供養」[(4)]と呼ばれる大祭を行わしめた。[339]大威力[(5)]あり信心ある王と長老モッガリプッタとは過去すでにかの自在力を有する人々に、このように見られていた。

（アソーカ王）教（法）に入るは終る。

大王[340]は翌日かの六万人の比丘達をして、最上の特相によって満足させた。[(6)]その輝ける時に、[341]かの后は適当に喜ばしめられ、講堂に入り床座に坐して、[342]ヒマラヤ山からそこに多数の天女達によって運び込まれ、守護せられている甘蔗の荷を見て、[343]甘蔗の一片を食べてみたいと言う欲のために十二指節の長さだけ切って、直ちに食味した。[344]（たまたま）かの王は、その近くに行きつつ、それを見て戯れ（の心）を興し后にこのことを言った。[345]『大きな目の人よ、柔らかく蜜に似たる甘き蜜の味を、美味を食して、さぞ美味かったであろう』と。[346]（それを）聞いて、心にかなわざるため忿りて王に言った。

『王よ、これはヒマラヤ山に生えたる甘蔗であり、だから天[347]が運んできたものであり、そのために私に福徳が生じたのです』と。王は（それを）聞いて喜びに満たされつつ『いとしき者よ、もし汝の善の故に、ここにわが権限を凡て汝の所有とするならば、[349]凡て完全に行って、いとしき者よ、汝の福徳を有頂にまで挙げて、他の福徳を無間（地獄）のあたりまで及ぼし、[350]今汝はそれを折伏することを行うと告げよ』と（言った）。『いとしき者よ、それ故明日六万（人分の）布を私は[351]欲しい。明日私は（それを）比丘達に与えるために、私に与えよ。それだけの布（を調達すること）により、（汝の）福徳は知られるようになるであろう。[352]もし汝が明日、私にその幸福を与えることが不能であるならば、[353]汝に王罰が加えられるであろう』と（言って）出て行った。王の言葉を聞いて『王は私を忿っている』と悲しみのために悪き顔となり憂の矢を与えられて、[354]幾度もため息をつきながら泣き悲んで、『あゝこの苦しみが生じ、憂が私の心にある。[355]私はこれらの布を何処で得るべきであろうか』と（言って）彼女は最上の臥床を旋転しつつ、[356]夜も殆ど寝ることもなかったと（言う）。（その時）法のために世間の四守護神が世間を守護していた。[357]多聞天(Kuvera)と持国天(Dhataraṭṭha)と広目天(Virūpakkha)と増長天(Virūḷha)（とである）。[358]その時かの多聞天はかの后の憂いているのを見た。すぐに近づいて、このよう

に言った。『皇后よ、心配なさるな。泣きなさるな。都ではかれらに布が与えられ、またあなたは辟支仏の清浄なることと、かれの果報を見るだろう』[359]と。そしてかれは円き帆製の美布を見せて[360]、その真中から布地を自らの威神力によりてかれらに与え、こう言った。『あなたはこの円い布を取ってこれを投棄するであろう。そうすれば高価なる無量の衣を得るでありましょう』[361]と言ってかの多聞天は后と共に出ていった。翌日[362]王はまた（従者たちに）囲繞されてやって来て比丘僧伽に美味なる食事と華々とを献じた。（王は）自らの近くに立てる后を見て、『后よ、汝は私に六万人（分の）布を与えよ』[363]と（言った）。『汝の福徳により、僧伽に衣を施与せよ』[364]と（王は言い、それに答えて）『大王よ、お望み通り、あなた様は（比丘僧伽に）遍く（衣を）与えるでありましょう』[365]と（后は）告げた。かの（后）は多聞天により与えられた天の円き（布を）取って、一対の布と高価なる布と等しいカッパ樹を持ち来たり[366]、王に手渡した。そこで一人の比丘の三衣に十分なる夫々の布をかれの手に持って[367]、僧伽の長老に施与し、第二の比丘にもまたそのように与えた。王はこのように[368]して、千人の比丘達に十分に衣を与えたのである。かれは[369]僧伽を送って最勝の都に入り、かの后を迎えにやり、自らは講堂を見るために後宮の女性達の真中にワーサワ（Vāsava 帝釈）の如く立ち[370]『后よ、作した行為を考察し、私は前に作されたことを知り、（汝の）徳を喜ぶ。よく汝は私の過失を耐え忍んでくれた。后よ、この主権を凡て私は汝に与えよう。汝は一万六千人の女達に汝の権力を行使せよ』[371]と（言った）。かくの如くに得たるのを見て、以前の愛すべき女性達が有していた嫉妬心を自然に捨てて再三再四、『王はこの一人の女性は如何なるものと思われますか』[372]と（尋ねた）。彼女の言葉を聞いて、『この者達は暗愚である』[373]と（言い）、『如何なる女宝の福徳も以前には知られなかった。私は女性達を嫌責することを知らしめるであろう』[374]と（言った）。さて一日王は蜜を初めとする一万六千の量の蒲桃果を煮させて、一部の蜜を内に置かせた。それら凡てを充たさせて、一方には蒲桃果を初めとするものを上に置かせて凡ての舞女達と他の后達を直ちに集合させた。『これより凡てのもので各自に欲するところのものを取れ』[375]と（言った）。（女性達は）『畏りました』[376]と言って、凡て彼女達は自らの欲するものを各自取っておいたが、彼女は凡ての後に自らは蒲桃果の団子の残ったものを得た。以前の想いが生じたので、彼女の手に蜜を初めに取って裂き、それを凡ての人達の前に見せて[377]『あなた達よ、ごらんなさい。少なき福徳は捨てられたのです。しかし一人アサンディミッター（Asandhimittā）だけが大いなる福徳を保持するのです』[378]と（言った）。后が自ら天の円き布を得た福徳の集積を明らかにしたのを聞いて[379]、そこで左側の手によっ

て得た布地[383]を投棄し、右手によりて彼女は天の布地をかの王に差し出した。五百人[384]（分の）布を従者達に与え、副王達にもまた五百（人分の布を）与え五百人[385]の青年の王達の后には種々なるものを、五十人の後宮達に順次に、彼女は与えたのである。かれら軍隊[386]には残りなく与え、かくの如く常に彼女は望む限りの間、与えたのである。その周辺の状況を王は見て喜び、驚いているようであったが、その不可思議[387]を尋ねた。『后[388]よ、汝はどのようにして得て、このすべての者の欲するのを与えているのか。汝の天の円き（布）を見て私は驚いた』（と言った）。『大王[389]よ、お聞き下さい。私の福徳が先になされた時にそれを多聞天は知って、やって来て私に言ったのです。「后[390]よ、惑乱しなさるな。先にあなたに布は与えられました。この布地を投げ出しなさい」と私に天の円き（布）を私に与えたのです。そこから天の円き[391]（布）を得てそれから私の思いが成就したのです。私の欲することの凡てが成就したのです。大王[392]よ、若し私がこの大地を残りなく布で覆い尽そうと欲すれば、それを行うことも可能なのです。過去[393]に諸の辟支仏の時に、王よ、この福徳がなされたのです。私に一衣を与えて、その果を思いました。かかるかの阿羅漢達と交際接触[394]することは得がたく、同様に辟支仏達や正覚者達との会合も（得がたいのです）。かの人々[395]が法を熟知せるその（方々との）出合いにより、その法味を味わい苦の終極に到るのです。人[396]たることも得難く、また信仰も得難く、勝者の法（に会うこと）も得難[397]く、また（その）教示（に会うこと）も得難いのです。今やかの凡てが人身を得て、信仰と正法の説示とが仏陀の教（法）において実現したのです。それ故に、大王[398]よ、あなたはしばしば財の施与をなされて、勝者の教（法）において広大なる得がたき功徳を積んで下さい。諸仏[399]においてなされた功徳も辟支仏や阿羅漢に布施された（功徳も）、それを量ることはできません。それ故あなた様は、布施を完全に行い、戒の善をなして下さい。戒[400]を守りつつ、心を調御し、不放逸なる善き友に親近すべきであり、法を実践し法王となるべきであり、法によりて人々を残りなく守護すべきであります。されば[401]かの（人々の）ために大果の種子を播きて生長させ給うた』と。

アサンディミッターによる法阿育の功徳終る。

第二結集[402]の時に、諸長老は未来を観察しつつ、かの王の時代に（仏）教の禍を見た。（かれらは）全世界において、その禍を破壊するものを観察しつつ、（梵界[403]における）生の永からざる状態の梵天のティッサを見た。かれらは、かれに近づき人中に生じ、その禍を破壊することを賢者に願った。（仏）教の光り輝くことを希求[404]するかれは、かれらに約束した。行者たちは若き（比丘）シッガワ（Siggava）とチャンダ

ワッジ(Candavajji)とに言うには、『百十八年を過ぎて（仏）[405]教の禍があるであろう。われわれはその（時まで）生きることはできないであろう。比丘らよ、汝たちはこの[8]諍論に関わらなかったがために、罰業を受けるべきである。汝たちの受[406]刑とは、このようなものである。すなわち大慧者梵天ティッサは（仏）教を輝かせるためにバラモンのモッガリ(Moggali)の家に再生するであろう。その時に汝たちの一人は、その子を出家させて（他の）一人はよく正覚者の言葉を習修させなければならない[407]』と。[408]

長老[9]ウパーリの弟子は、ダーサカ(Dāsaka)であり、かの（ダーサカの弟子）はソーナカ(Sonaka)であり（シッガワとチャンダグッタの）二人（の長老）は（ソーナカの）弟子（であった）。[409]かつて[10]ウェーサーリー(Vesālī)にダーサカと言う学識ある[11]バラモンがいた。（かれは）三百の弟子の最年長として、師(ācariya)の許に住んでいた。十二歳にして（三）[410]ヴェーダに通暁し（ほかの）弟子たちと共に遊行しつつ、結集を行ってから[12]ワールカ(Vāluka)園に止住しているウパーリ長老に会い、かれの傍らに坐し諸ヴェーダ中の難解な箇所を問うた。かの（ウパーリ）はこれを解説した。『青年よ、[411]一つの法は凡ての法に従うものであり、すべての法は一法に随うものである。そ（の法）とは何か』と。長老はこのように（真法の）名について言ったのであるが、しかしかの青年[412]は（これを）知らなかった。（かれはそこで）尋ねた。『それはどんな呪[13]文(manta)でありますか』と。『仏陀の呪文である』と（かれは）言った。かれは『（私にそれを）与えて下さい』と（言った）。かの（ウパーリが）言うには『私たちの衣[413]服をつくろうものにのみ授けるのである』と。そこで（ダーサカは）呪文の意義を師(guru)と母と父に尋ねた。青年は[414]三百人の青年たちと共に長老の許において出家し、次いで具[14]足戒を受けた。かのウパーリ長老は、ダーサカ長老を最長老[415]とする一千の漏尽者にたいし全三蔵を教えた。長老の許で（三）蔵を学持したものの中には、無数の他の聖者や凡人があった。[416]

[419]カ[15]ーシ国にソーナカと称する隊商主の息子がいた。かれは母と父と共に商いのために、ギ[16]リッバジャ(Giribbaja)にやって来た。かれは十五歳の童子の時に竹林(Veḷuvana)（精舎）[420]に行き、かれと共に仲間の三十五人の青年（もまた）やって来た。かれらはそこで衆会と共にダーサカ長老を見て、信心[421]を起し出家することを乞うた。かれ（長老）は言った。『汝の師に尋ねなさい』と。それからかの童子ソーナカは三度の[422]食事を摂らずに、母と父の許しを得て、竹林に行き、これら[423]の童子と公にダーサカ長老の許において出家し、具足戒を受け三蔵を学んだ。かのソーナカは煩悩を滅し三蔵に通じた一[424]千の長老の弟子衆の最長老となった。

パータリ(Pāṭali)[425](17)と言う都にシッガワ(Siggava)と言う聡明な大臣があった。かれは十八歳の時に、三時[426]に相応しい三宮殿に住んでいたが、一日かれの友人で大臣の子であるチャンダワッジ(Candavajji)を伴って、五百[427]人の従者たちに囲まれてクックタ園(Kukkutārāma)に行き、ソーナカ長老を見た。時[428]に（かれは）諸根を制御して定に入り坐している（長老）を礼拝したが、かの（長老の）話しかけないのを知って、そのことを僧伽に尋ねた。（かれら[429]が言うには）『友よ、入定中の人は答えないのである』と、『ではどのような場合に（定から）出られるのですか』と問うたので、比丘たちは、『師[430]に呼ばれるとき、僧伽の呼ぶとき、時間の終りによる場合、寿命の尽きる場合に（定から）出るのである[431]』と言って、かれら（童子たち）の機根を見て、（かれらは）僧伽の（呼び出しの）言葉をかけた。それでかれは（定から）出て、かれらのところに来た。童子[432]は問うには『大徳よ、（あなたは）どうして話されなかったのですか』と。かれが言うには『楽しむべきことを楽しんでいたのである』と、（かれは）『私どもをも、また楽しませて下さい』と言った。（長老[433]は）言った。『私たちのようになれば、楽しむことができるであろう』と。そこでかれは母と父の許しを得て、かの童子シッガワとチャンダワッジ[434]並びに五百の人たちもまた長老ソーナの許において出家し、具足戒を受けた。かれら[435]二人は和尚(upajjhāya)の許において三蔵を学び、後に六神通に達した。

かの[436]長老シッカワはティッサが再生したと知って以来、七年の間（毎日）かれの家を訪れた。『[437]行きなさい』と言う言葉を七年間その家において（一度も）聞かなかったが、第八年に（初めて）『行きなさい』と言う言葉を聞いた。（外[438]から）入りながらバラモンモッガリは、出て行こうとするかれを見て、『（わが）家で何か得られましたか』と問うたが、『そうである』とかれは答えた。（モッガリ[439](18)は）家に行って問うて『何も施与しなかった』ことをバラモンは（知り）、かれらの言葉を聞いて翌日（再び）、家[440](19)に来た長老を妄語をもって責めた。長老は言った。『バラモンよ、汝の家に来つつあった時に、「[441]行きなさい」と言う言葉を七年間は聞くことはなかった。昨日(20)「お通り下さい」と家から（言う）言葉を聞いたのです』。浄[442]信あるバラモンは長老の言葉を聞いて、常に自分の食をかれに与えた。次[443]第に、かれの家人が凡て信をもつようになり、バラモンは家において、常にかれに席を与えて食の供養をした。

かく[444]の如く、次第に時は過ぎて、かれティッサ童子は十六歳となり、三ヴェーダの彼岸に至った。長老は『家において論議の等起があるであろう』と（神通力をもって）童子の席[445]（のみ）を置き、（他の）席を見えなくした。梵界[446]から来たかれティッサは清浄を欲したので、それ故かれはかれの牀座

を（長老のために）設けた。長老が[447]（その家に）立った時家の人々は、他の牀座が見えないので、狼狽してかの（ティッサの席）をかの（長老のために）設けた。師[448]の許から帰って来た青年は（自分の牀座に）坐っている（かの長老）を見て、怒り不適意の語を述べた。『誰が[449]（21）（わたしの）席をもって、沙門に与えたのか』と。長老は『青年よ、汝はどのような呪文を知っているか』[450]とかれに言った。青年はかの長老の問いを言いかえした。長老が『私は知っている』と自称した時、かれは長老に、諸ヴェーダ中の難しい所を問うたが、長老はかれに（これを）説明した。か[451]の長老は在家であった時に、ヴェーダに通暁していたから、無碍解に達したものがどうしてかれに説明できないと言うことがあろうか。長老は[452]（22）青年に『私は多くの人々により尋ねられたが、今は私が問いを発しよう』と言って、自信ある長老は（青年に）問うた。『心の生じて滅しない人の心は、滅して生じないであろう。[453]心の滅して生じない人の心は、生じて滅しない』と（は如何なることか）と。大慧ある長老は[454]チッタヤマカ（23）のこの問を問うたが、（その問いは）かれにとって闇のようであった。かの青年はかの（長老に）言った。『比丘よ、この呪文は何と言うか』と。『仏陀の呪文である』とかの（長老）は言った。[455]『（私に）与えて下さい』と（かれが）言った時に、『われわれの衣服を保持する者に、授けるであろう』と（言った）。

母[456]と父の許しを得て、呪文のためにかれは出家した。長老は満足して出家させて、業処を授けた。修[457]行を実践しつつある大慧ある人は間もなく預流果に至った。長老はかれのこのような状態を知って、経[458]論を学得させるために長老チャンダワッジの許に遣わした。かれはそれを学得した。その時に、[459]かのシッガワ行者は具足戒を授けて、律を学得せしめさらに残りの二蔵をもまた（教えた）。それからかの若きティッサは[460]観法（vipassana）を始めとし、時に六神通を得て、長老の地位に達した。か[461]れ（の名声）は、太陽と月の如くに輝いた。世間はかれの言葉を正覚者の言葉の如くに思った。

モッガリプッタティッサの物語は終る。

一[462]日、かの副王（24）は猟に行き、森で嬉戯している鹿を見た。見てこのように思った。『鹿でさえこのように森で草を食んで嬉戯しているが、安楽に食と住とを有する比丘達が何故に嬉戯しないのだろうか』。[463]（かれは）家に帰り自らの考えを王に告げた。か[464]（の王）はかれを教えるために七日間かれに王国を与えた。『王子よ、汝は七日間この王国を受けよ。その[465]後汝を私は殺すだろう』と王は言った。（かくして）七日が過ぎた時『汝はどうして憔悴したのか』と（王は尋ねた）。[466]『死の恐怖により（憔悴）したのです』と言った時、王は再びかれに言った。『七日経ったら死ぬであろうと（考え）て、[467]汝は（これらを）嬉戯してはならない。愛しいものよ、常に

死のことを想っている行者が、どうしてこれを嬉戯していられようか[468]』と。

かの[25]（ティッサは）兄にこのように言われて、教を信ずるに至った。その後、狩猟に行き、無漏の長老が象によって、サーラの枝により扇がれているのを見た。『いつか私もまた[469]勝者の教において出家して森に住むであろうか』と慧ある人はこう思った。長老はかれの浄心の生起したのを知って、空中を飛んでやって来て、アソーカ園の蓮池の水の上に立ち、[470]虚空によき衣を（脱いで）池中に潜り、身体を洗浴した。か[471]の副王はこの神通をみて『今日より出家しよう』と覚慧ある人は賢い決心をした。（かれは）王の許に近づいて恭々しく出[473]家することを乞うた。王は（かれの決心を）遮止することができず、かれを連れて多くの従者と共に自らの精舎に赴いた。（かくして）かれは長老マハーダンマラッキタ（Mahāddhammarakkhita）の許で出家した。かれと共に四千人の人々[475]もまた（出家した）。しかしその後出家したものの数は知られない。人王の甥のアッギブラフマー（Aggibrahmā）として名[476]高き（人）は、王女サンガミッター（Saṅghamittā）の夫であった。彼女と彼の息子はスマナ（Sumana）と呼ばれていたが、[477]彼もまた王に乞うて副王と共に出家した。多くの人々にとって利益となった副王の出家は、かのアソーカ（Asoka）（王）[478]の治世第四年であった。そこで具足戒を受け機根を具足せるかの副王は、精進して六神通を具せる阿羅漢となった。[479]

かれは凡てうるわしき精舎（の建立に）努力し三年間に全[480]都市に（それら）すべてを完成させた。工事の棟梁である長[481]老インダグッタ（Indagutta）の神通力により、アソーカアーラーマ（阿育園）と呼ばれるものも完成した。王は勝者によって使用された場所のそこここに美しい支提（cetiya）を建立[482]させた。八万四千の都市の凡てから『精舎は完成した』という書簡が毎日やって来た。大威力あり神通を有し勇猛なる大[483]王は（完成の）報告を聞いて、直ちに全精舎において大祭[484]（供養会）を執行しようと思い、大鼓を打って市中に布告せしめて言うには『これより七日間全精舎の祭りを凡ての地方[485]において一斉に行うべし。地面（一）由旬毎に大施物を与えよ。村々の僧園や路々には装飾をせよ。凡ての精舎において[486]あらゆる大施を時に応じ、力に応じて比丘僧伽に施与せよ。[487]そこここに灯明の花環と華鬘の装飾とにより、また凡ての楽器により、凡て（の人々は）布薩の支（八斉戒）を守って法[488]を聴け。またその日には種々の供養を行うべし』と。かくして凡ての（人々は）あらゆる所に諸種の儀式を行い、快[27]意の天界の供養の準備をした。[489]

その日、大王は凡ての装飾を着け、宮女や大臣を伴って軍[490]勢に囲繞されて、恰も大地を破るが如く自らの（阿育）園に[491]赴いて、最上の僧伽に礼拝して、僧伽の真中に立った。その[492]

集会中には八十倶胝[494]の比丘がいた。かれらの中には十万の漏尽の行者がいた。またそこには九十万の比丘尼がいたが、しかし漏尽の比丘尼はその中で千人であった。かれら漏尽の[495]（人々は）ダンマーソーカ(Dhammāsoka) 王の教化のために世界開顕 (lokavivaraṇa) と言う神変を行った。（アソーカ王は）以前は悪行によってチャンダーソーカ (Caṇḍāsoka) と呼ばれていたが、以後善業によってダンマーソーカ（法阿育）と呼ばれた。彼[497]は海で囲まれた全ジャンブディーパと種々の供養の荘厳された凡ての精舎を見た。[496](28)

それらを見て大いに満足せる（王は）坐して僧伽に問うに[498]『大徳よ、善逝の教えにおける（布施の中で）何人の施捨が最も大きかったか』と。王の質問にかの長老モッガリプッタは答えた。『善逝の在世においてさえも、あなた様のような施捨をなさる方はおりませんでした』と。その言葉を聞いて[499]王は益々満足して、彼に問うた。『私のような仏陀の教法の相続者はいるのか』と。長老は王子マヒンダ (Mahinda) の機根と同じく王女サンガミッター (Saṅgamittā) の（機根を）観察して、教[501]（法）の繁栄（それら）から生起すること、また教（法）の重荷を荷うのも（彼らなることを）予知し、王に答えた。『[502]（あなたのような）大施与者のみが、教（法）における相続者ではありません。大王よ、平坦なる大地より、梵界の最高までの利益を蓄積したものが、比丘僧伽に対し、大[503](29)

施を残りなく与えるのであろうところのものは、人王よ、[505]（それは）資具の施与者と呼ばれるのみであります。しかしながら（自己の）子女を教（法）において出家せしめるものこそが、われらの教（法）の相続者であり、施与者でもあります』と。時に、王は教（法）の相続者となることを望んで、傍にいるマヒンダとサンガミッターに問うた。『[506]愛しき者らよ、汝等は出家するのであろうか。出家することは誠に勝れたることである』と。父の言葉を聞いて、彼等は父に言った。『[507]陛下よ、若しあなた様がお望みでしたなら、今日私どもは出家いたしましょう。出家によって、あなた様にも私どもにも利得があるでしょう』と。彼[508](30)（マヒンダ）は、副王の出家した時以来、青年（マヒンダ）は出家することを望んでいた。彼女（サンガミッター）もまたアッギバラモンの（出家以来）出家することを決意していた。王[509]は（当初）マヒンダに副王の位を与えたいと思ったが、それよりもこの（出家が）勝れていると（考えて）出家することを許した。[510]（かくして）智慧と容色と力ともに勝れている愛し子マヒンダと王女サンガミッターを供養恭敬とともに出家せしめた。[511](31)時に、かの王子マヒンダは二十歳であり、王女サンガミッターは十八歳であった。その日、彼は出家して具足戒を受け、[512]同じ日に彼女（もまた）出家して（戒）学を授けられた。王[513]子（マヒンダ）の親教師はモッガリ (Moggali) と呼ばれる人[514](32)

であり、長老マハーデーワ（Mahādeva）は（王子を）出家せしめ、マッジャンティカ（Majjhantika）は、羯磨儀規（kammavācā）を宣し、彼マヒンダは具足戒を受ける円囲いの場で、[515]アラカンと無碍解（paṭisambhidā）とに到達した。（王女）サンガミッターの親教師はダンマパーラー（Dhammapālā）と言う有名な（長老尼）で、阿闍梨（ācāriya）はアーユパーラー（Āyupālā）であった。彼女もまた間もなく無漏となった。[516]ランカー島の資助者であるこの両者の教（法）の燈明は、ダンマーソーカ王の第六年に出家した。島（の人々）を明浄ならしめた大マヒンダは三年間、親教師の許にて三蔵を学修した。[517]時に、かの比丘尼（サンガミッター）は新月の如く、比丘マヒンダは太陽（の如く）兄と妹の二人は仏陀の教えを輝やかせた。[518]

かつて、猟師がパータリプッタから森に行って、キンナラ（Kinnarī）のクンティー（Kunti）と同棲したと言う。彼との同棲により、彼女は二人の息子を産んで、兄はティッサ（Tissa）弟はスミッタ（Sumitta）と名づけられた。[519]その後二人は長老マハーワルナ（Mahāvaruṇa）の許において出家して、アラカンに達し、六神通の徳を得た。[520]兄は（ある日）虫の毒により足に疼痛が生じて、弟から尋ねられて、一掬の酥油が薬であることを告げたが、[521]かの長老は病人の（ための）務めを王に告げることも、食後に酥油を求めに行くことも拒否した。[522]『若し汝が托鉢のために出掛けて、酥を得たならばそれを持って来て欲しい』とかの長老ティッサ[34]は最勝の長老スミッタに乞うた。[523]行乞に出掛けた時、一掬の酥油を得られなかったので病は重くなり、百瓶の（量の）酥によっても治すことができなくなった。[524]その病のために長老は命終に到って、比丘達を誡めて涅槃する決意をした。彼は虚空に坐して、火定（tejojjhāna）によって思いのままに体を確立して、般涅槃した。[525]身体から発する父焔は長老の全身を焼いて、無肉[35]の灰（nimmaṅsacchārika）としたが骨は焼けなかった。

王はかの長老の涅槃を聞いて、軍勢に囲繞されて、自らの園に来た。[526]王は象の背（に乗り）行って（虚空にとどまっている）かの骨をおとさせて、遺骨の供養をなさしめて、僧伽に彼の病を尋ねた。[527]僧伽[36]は、王にそれを語って言うには『大病が生じたのです』と。[528]（王は）それを聞いて宗教心をおこし『王国内にある薬を比丘僧伽に与えなかったために、薬がなくそのために滅したのだ』と（言い）（都城の）四つの門に泉池を堀らせた。[529]堀らせおわって、掃除をさせ、薬を満たさせた。そして四方の僧伽に薬を与えた。[530]『比丘僧伽が薬を手に入れられなくては困る』と。[531]長老スミッタは経行（所）において経行しつつ涅槃した。[532]それよりも多くの人々が、仏陀の教えを信じた。クンティーの息子であり世間を利益する人である彼等二人の長老は、アソーカ王の第八年に涅槃に入った。[533]

[537]その後、僧伽の利得は益々増大した。後に信楽した人達が、所得を増大するに到った。[538]それによって所得と恭敬とを失った外道達は所得を得ることも、乃至彼等は食と衣すらもまた得ることがなかった。[539]自ら黄衣をたずさえて、比丘達とともに住した。彼等は彼等自身の所説を仏の説であると説き、思いのままに自ら行為をなした。

[540]かくして徳の確立したかの長老モッガリプッタは、教（法）に生じたかの極めて麁悪なる垢濁を見て、[541]永き時を見て、それの静まることを期待して比丘の大集団を長老マヒンダに委ね自らは、[542]ガンガーの上流アホーガンガー（Ahogaṅgā）山にたった一人で七年間独処に住した。[543]多くの外道の群と（かれらの）悪語のために比丘等は、法によって彼等を遮止することが出来なかった。[544]そのために比丘等はジャンブディーパの全園林において七年間布薩（uposatha）と自恣（pavāraṇa）とを行わなかった。[545]

大名あるダンマーソーカ大王は、それを聞いて、一大臣を最勝のアソーカ園に派遣した。[546]『汝は行ってこのことを静め、比丘等にわが園において布薩を行わしめよ』と（命令した）。[547](38)かの大臣はその行為を尋ねることが出来なくて、他の大臣達に近づきこの言葉を告げた。[548]『卿等よ、王は私をして行かせ布薩を（行わしめる為に）派遣された。（私は）この事がら[549]を静めて布薩を行わしめることが（できるだろう）。私はいかにしたらこのことを静めることが出来ようか』と、その時彼等大臣達は彼に教えて言った。[550]『恰もあらゆる方法で苦しめられつつあるものが、賊を殺害するように、そのように汝によって比丘は殺されるとて喜ぶ』と。[551]かの愚鈍者は行って比丘僧伽を集めしめた。（彼は）『汝達は布薩をなせ』と王の命令を告げた。[552]『外道と共に私達は布薩を行わない』と比丘僧伽は、かの意の昏迷せる大臣に告げた。[553]かの大臣は幾人かの長老達を順次に剣によって頭を刎ねて『布薩を行え』と（言った）。[554]王の兄弟であるかの長老ティッサはこの所作業を見て、急いで行って彼の傍の座に坐った。[555](39)かの大臣は長老を見て、王の許に行って告げた。『大王よ、[556]これだけの比丘が、わが剣によって（頭を）刎ねられました。聖者ティッサがおいでになりましたが、私は何をしましょうか』と。凡ての出来ごとを聞いて王は悶え苦しんだ。[557]直ちに（アソーカ園に）赴き、驚いている比丘僧伽に問うた。[558]『このように作された行為の罪は誰にあるだろうか』と。彼等の中のある愚かな者は『あなた様に罪があります』と言い、ある者はまた『双方に（あります）』と言い、[559]賢者は『あなた様には（罪は）ありません』と（言った）。それを聞いて、大王が言うには『比丘の誰か私の（この）疑を除去して教（法）を摂受しうるものがあるか』と。[560](40)『王よかのモッガリの子、長老ティッサがおられます。（彼は）あなた様の疑を除去して教（法）を摂

受するでしょうと、僧伽[561]は王にかく言ったので、王はそこに坐した。彼等四人の法説者長老を選び、彼等[562](41)は各千人の比丘に囲繞せられ、また同じく四千人の人々に（囲繞せられた）四人の大臣を、その日[563](42)彼（の王）自身の言葉によって、『汝等、長老と共に行って長老（ティッサ）を伴い来るように』と派遣した。かの長老達はそこに行って、大いなる慧を乞う[564]た。かの長老は彼等のその言葉を聞いたが来なかった。かの[565]人々は再びやって来て、王にそれを告げた。王は再び八人の法を説く長老と八人の大臣達を、一万六千人の人々と共に遣[566]わした。彼等はかくかくの如く言ったが、か（の長老）は『私は行かない』と言った。また凡ての人々が戻って王にそ[567]れを告げた。その時に、かの王は比丘僧伽に問うた。『大徳[568]よ、二度の使節を（送ったが）何故長老は来られないのか』と、『（彼を）召す』と言ったので、僧伽はか（の王）にこれを告げた。王は『どうすれば長老は来るであろうか』と尋ね[569]たので、比丘達はかの長老の来る理由について告げて（言うには）『（若し王が）「大徳よ、教（法）を護持するため支持者となって下さい」と言われれば、大王よ、かの長老は来[570]られるでありましょう』と。重ねて王は十六人の長老と十六人[571]の大臣とにそれぞれ千人の人々を（付けて）このように申し渡して遣わした。『大徳よ、か（の長老）は老令かそれとも[572]若年か』と、『大王よ、大長老はより高令であり、漏尽の人であります。長老は高令なるが故に車には乗らないでありま[573]しょう』。『大徳よ、長老は何処に住んでおられるのか』とか（の王）は尋ねた。『大王よ、ガンガーの上流のアホーガンガーと言う所に（住んでおられます）』と（言ったので）、『大徳よ、あなた達は船をつないで（長老を）お連れしなさ[574]い』と（言った）。彼等はかの（長老の）許に行って、王の伝言を伝えた。それを聞いて、大長老は憐れみの心を起し、[575]こう言った。『私は出家してこのために此処に来たのである。しかし今こそ仏陀の教（法）を宣布すべき時に到りました』[576]と。（長老は）立ち上がり、革瓶を打って出ていった。夜分[577]に国王は、ある夢をみた。真白な大象が右手を執って頭で摩[578]触するのである。王は驚き不思議に思って、バラモン達に（その夢について）尋ねた。『大王よ、恐れることはありま[579]せん。あなた様には吉祥なることがありましょう。ある一人の偉大なる沙門が（あなた様を）守護すべくやって来て、[580]（あなたの）右手を執って疑惑を除去するでありましょう。』その時、大王は長老の来訪を聞き、かの長老に会いに出て行[581]き、膝まで水につかり舟から降りつつある長老に、自ら恭々[582]しく右手を与え、大王はこのように言った。『大徳よ、あなたは私を憐んで、私の右手をお執り下さい』と。その時、供[583]養されるべき大長老は、王への哀愍（の心）から、王の右手[584]に凭れて舟から降りた。それを見て支配されている者は『私

は（彼を）切るだろう』と鞘から刀を抜いて、大王の影を見[585]て言った。『以前私は得られない理由のために楽味を見ることがなかった。長老に負かされてはいけない』と。

王は長老をラティワッダナ（Rativaddana）園に導き、長老の足を濯ぎ油を塗り、坐に就かせて、王[587]は長老の力の状態を考察しつつ『大徳よ、私は（あなたの）神変を見たいと思います』と言った。『[588]どのような（神変）を』と言われた時に『大地震動を』とか（の王）は答え、再びかの（長老）は『凡て（の震動）か、或わ一部分（の震動）か、何れを見たいと望んでいられるのか』と、か（の長老は）言った。『[589]何れが難しいか』と問うたので、『（王よ）一部分の震動が難しい』と、（それを）聞いて、それを見ることを望むと言った。[590]長老は周囲一由旬の結界（sīmā）の中の四隅に軍、馬、人、水を充した水盤を置[591]かせて神通力を以て、これらの半分とともに一由旬の大地を震動させて（王にこれを）見せるため、そこに坐らせた。[592]かの（王）は神変を見て、それが終った時に『長老は教（法）を策励することが出来るであろう』と王は悪作[593]について尋ねた。『大徳よ、私は大臣を、わが精舎の諍論を静めるために行かせ、比丘[594]等よ、今日布薩を行なわしめよと遣わしたのである。そして彼等はこれだけの比丘の生命を奪ってしまった。[595]されば（この）業による次の悪しき（果）の有りや無しや』と。（そこで）長老は、『悪意が無ければ果を引く業は無い」と王に覚らせて「鷓鴣本生話（Tittira-jātaka）」[43]を物語った。

註

（1）317より339偈までは Mhv. 73～95 までの偈に相当する。この箇所では、沙弥 Nigrodha により帰仏した Asoka 王は多数の外道を斥け仏教の比丘六万に種々の供養を行い、Moggaliputta-Tissa により、仏教には八万四千の法門があることを教えられ、領土の各都市八万四千に八万四千の精舎を建立せんことを決意したこと、ニグローダと病者とに日々大金を与えたこと、Mahākāla 龍王により示現された仏陀の三十二相八十随好相を見、仏陀に対する信仰を深めて行く過程の説話が語られる。

（2）bhusāpetvāna・bhūsāpetvāna の誤殖。

（3）テキストの duve は Mhv. 85. では ekaṁ となっている。329偈の solasitthisahassānaṁ duve yevadine dine は、Mhv. 85. には無い。

（4）「目の供養」（akkhipūja）については Mhv. Tīkā 209. 31ℓ.～ に So hi sattāhaṁ nirāhāro hutvā buddhārammaṇāya pītiyā ṭhitako va nirantaraṁ buddharūpaṁ eva animisehi akkhihi olokayamāno Satthussa akkhipūjaṁ nāma akāsi の如き説明がある。

（5）Dip. V. 55f. f.～ の記述は、テキストの501偈以下の記述に関する事柄。

（6）340偈から400偈までは Mhv. にはまったく存在しない。

Extended Mhv. のこの箇所の記述は、後世他の説話を以って補足したものであろうか。この部分は、アソーカの后の功徳により四天王の助けを得て、六万人の比丘の衣を調達するに至るストーリーが語られる。

(7) 401偈以下は Mhv. 96～の偈に相当する。

(8) 第二結集のことを指している。

(9) Upāli—Dāsaka—Sonaka—┌Siggava└Camdavajji の長老の系譜が語られる。

(10) ダーサカ長老の前生譚が語られる。

(11) dija 再生種、即ちバラモンのこと。

(12) Vālukārāma＝Vālikārāma は Vesālī にある精舎。

(13) manta (Skt. mantra) バラモンであるためマントラと思ってこの問を発した。ここでは仏陀の教法を指して言っている。

(14) ダーサカの具足戒を受けたことについて、Nibbute lokanāthasmiṁ vassāni soḷasaṁ tadā, Ajātasattu catuvīsaṁ, Vijayassa soḷasaṁ ahū, samasaṭṭhi tadā hoti vassaṁ Upālipaṇḍitaṁ, Dāsako upasampanno Upālitherasantike. (Dip. IV. 27ff.) の記載がある。即ち仏滅十六年、アジャータサットゥの治世二十四年にウパーリについて具足戒を受けた、と伝えている。

(15) Kāsi は古代インド十六大国の一として算えられている。バーラーナシーはその首都。仏陀時代はコーサラ国に併合され、パセーナディ王に統治されていた。

(16) Giribbaja (Skt. Girivraja) は Rājagaha (王舎城) の異名。

(17) Pāṭali＝Pāṭaliputta

(18) 438偈の "na adamhā" ti brāhmaṇā; sutvāna tesaṁ vacanaṁ は Mhv. 134 には無い。

(19) 440・441の二偈は Mhv. になく、挿入されたもの。

(20) 「お通り下さい」(aticchatha) とは、施食をことわる時の言葉。

(21) 「誰が沙門にわが座席を与えたか」については、Samantap. 1. p. 38～ にある。449偈の一行目 Ko so pallaṅkam ādāya samanassa adapayi? は Mhv.141～142 には無い。

(22) 452の偈は Mhv. にはなく挿入されたもの。

(23) Cittayamaka (双心) は巴利七論の一である Yamaka (双論) VIII. Cittayamaka

(24) 副王 (uparājan) とはアソーカの末弟である Tissa のこと。

(25) 468偈は Mhv. 160•161 の偈を一つにした三行詩となり Mhv. 161 nisinnaṁ rukkhamūlasmiṁ so Mahādhammarakkhitaṁ の一行が脱落している。

(26) 工事のなかなか進捗しない時には、インダグッタ長老の神通力によって進められ、これを完成させ、アソーカアーラーマは三年で竣工したと言う (Samantap. I. p. 48)。

(27) devalokamanoramā は nakkhattaghuṭṭhe devanagare devagaṇā viya manussā manoramaṁ mahāpūjaṁ patiyādesum ti の意味であると説明されている。(Mhv. Ṭīkā p. 226. 2ℓ.～)

(28) アソーカの悪行とは abhisekato pubbe katena ekūna-satabhātughātakena lāmakakammunā. 即ち、王位を得るため長兄スマナ以下九十九人の異母兄弟を殺害したことを指している。

(29) 503の二行目の偈と504偈の二行からなる偈はMhv.にはなく、503の一行目の偈と505の一行目の偈とが、Mhv. V. 196の偈となっている。505偈は変形の三行詩であり、一行目の偈を除いた後の二行詩が、Mhv. V. 197偈に相当する。

(30) 509偈は変形の三行詩であり、二行目の偈はMhv. V. 201にはなく、挿入されたもの。

(31) samaham は sapūjāsakkāram であると言う (Mhv. Ṭīkā. p. 229. 31ℓ.)

(32) Moggali=Moggaliputta-Tissa.

(33) Dhammapālā はまた Dhammapālī とも呼ばれるアラカン果に達した長老尼であると言う。(cf. Sp. i 51.)

(34) 午後の托鉢を拒否した経緯は、僧伽の規定に基づく (cf. Mhv. Ṭīkā p. 232)

(35) Tissa は Sp. I. p. 52 には Kontiputta-Tissa となっている。

(36) 無肉の灰 parinibbutassa sarīra nikkhantajālā therassa sakalakāyam nimmaṁsaṁ nicchārikaṁ katvā ḍahī であると解説している (Mhv. Ṭīkā p. 233.3ℓ.~)

(37) 532から534までの偈のストーリーは、内容的には Mhv. V. 224~225に似ているが記述が異なる。

(38) 547から550までの偈は Mhv. に相当する偈は無く、挿入されたもの。

(39) 555と556の偈は、Mhv. V. 242 の二行詩となっており、555の二行目と、556の一行目の詩は附加されたもの。

(40) Mhv. V. 246の二行の偈を分け、夫々560の一行目、561の一行目に出して、夫々に二行目の詩を補っている。従ってこの二行は Mhv. V. 246には無い。

(41) 562の偈は Mhv. V. 247 の記述内容に類似している。

(42) 563の偈は Mhv. V. 248 に近似の内容。以下568偈までは Mhv. 249 の内容に追加して拡大したもの。

(43) Fausböll: Jātaka III. p. 64. ff. Sp. I. p. 60~